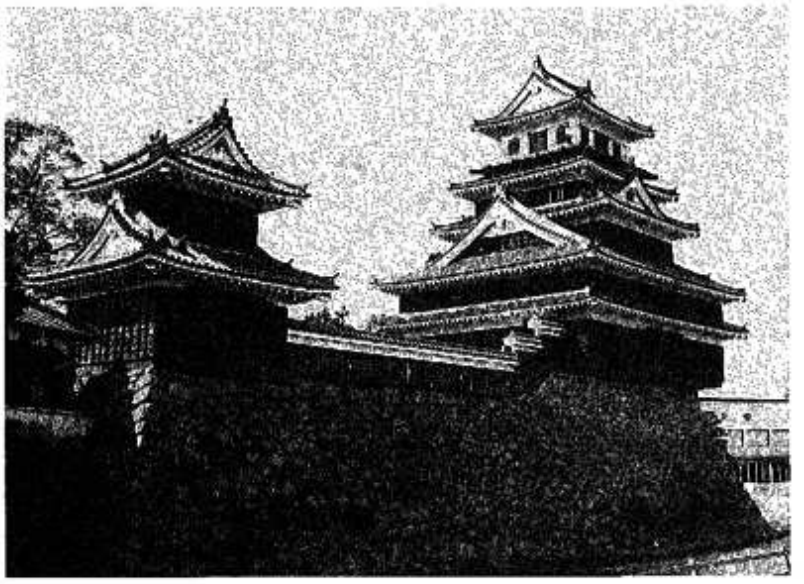
おかこい山

― 中津城内堀土塁遺構の調査 ―

中津市文化財調査報告 第９集



1990

中津市教育委員会

序

大分県の北端に位置する中津市は、県北の中心都市として発展してまいりました。その中心となりましたのはやはり、近世より受け継れてきました、商業を中心とした経済体制であったと言えます。この基礎を築きましたのは、黒田氏、細川氏、小笠原氏、奥平氏と続いた中津藩の諸大名であり、そのシンボルが中津城であります。

中津城につきましては１９６５年（昭和39年）に現在の天守閣が復元され、本丸跡は公園地として残され、豊前三大祭の１つ、「中津祇園」の主会場の１つとして利用されるなど、中津観光の目玉として、また市民の憩いの場として親しまれております。

しかし、その他の中津城の遺構については、近代以降、付近が中津市の中心街として急速に開発されるなどしたため、ほとんど消滅してしまいましたのが現状であります。今回、調査を実施いたしました中津城内堀土塁遺構は通称「おかこい山」として広く市民に知られ、中津城の面影を残します数少ない遺構の１つでありました。中津市教育委員会では、そうした「おかこい山」の重要性から、その保存について関係者と協議を行なってきましたが止むなく調査を実施し、記録としてこれを保存することといたしました。本書が今後の中津市の歴史を研究する上での一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するにあたり、調査費用の負担等について多大なる御協力をいただきました株式会社穴吹工務店（本社高松市）に対し、深堪なる謝意を表する次第です。

１９９０年（平成２年）９月３０日

中津市教育委員会

教育長　武　信　　元

例　　言

一、本書は株式会社穴吹工務店によるマンション建設に伴い中津市教育委員会が実施した「おかこい山」（中津城内堀上墓遺構）の発掘調査報告書である。

一、調査は中津市教育委員会が主体となり、平成1年2月27日～4月9日までの期間実施し、費用は事業者である株式会社穴吹工務店が負担した。

一、調査団の講成は次の通りである。

調査責任者	武信　元	中津市教育委員会教育長		
調査事務	下原恒利（調査年度）宮崎俊幸（報告年度）市民文化センター館長			
	山木民子（　〃　）塩谷十起雄（　〃　）		〃	文化・会館係長
	八木山治	中津市教育委員会	市民文化センター	嘱託（調査年度）
	田中布由彦	〃	〃	主任
	渡辺明美	〃	〃	臨時
調査担当	栗焼憲児	〃	〃	主任

一、本書の編集および執筆は栗焼が担当した。

一、「第3章、中津城の沿革」については半田隆夫氏（中津藩政史料刊行会）の玉稿をいただいた。記して謝意を表する次第である。

一、本書の作成にあたり、朝田泰氏（中津市文化財調査委員）には陶磁器について、有益な御助言をいただいた。また資料整理については中野温子、岩崎弘子、秋吉三和子、（中津市文化財資料室）の協力を得た。

目　　次

第1章　はじめに
1）地理的環境 …… 1（栗焼）
2）調査に至る経過 …… 1（〃）
3）調査の概要 …… 2（〃）
第2章　遺跡の調査
1）遺　　構 …… 5（〃）
2）遺　　物 …… 9（〃）
3）ま と め …… 13（〃）
第3章　中津城の沿革
1）中津城と城下町の形成 …… 14（半田）
2）中津城の構造 …… 19（半田）

挿　図　目　次

図　1　中津城周辺図 …… 3
図　2　「おかこい山」地形図及び断面図 …… 4
図　3　「おかこい山」トレンチ配置図 …… 4
図　4　第２トレンチ東側土層図 …… 5
図　5　第３トレンチ遺構実測図及び土層図、見通し図 …… 7
図　6　「おかこい山」出土遺物実測図 …… 10
図　7　「おかこい山」出土軒丸瓦実測図 …… 11
図　8　「おかこい山」出土軒丸瓦、軒平瓦実測図 …… 12
図　9　「黒田如水絵張」（臼杵市立図書館蔵絵図より整図）…… 18

図　版　目　次

図版１　(1)「おかこい山」全景（調査前）…… 21
(2)「おかこい山」全景（調査状況）
(3)第２トレンチ「石積」状況（その１　西側より）
(4)第２トレンチ「石積」状況（その１　北側より）
図版２　(1)第２トレンチ「石積」状況（その２　西側より）…… 22
(2)第２トレンチ「石積」状況（その２　北側より）
(3)第２トレンチ東側土層
(4)「おかこい山」調査状況（東側より近景）
図版３　(1)第３トレンチ道遺構１、２検出状況（北側より）…… 23
(2)第３トレンチ道遺構１近景（北側より）
(3)第３トレンチ道遺構１、２石垣検出状況（北側より）
(4)第３トレンチ道遺構１、２検出状況（西側より）
図版４　(1)第３トレンチ道遺構１、２と土層との状況（東側より）…… 24
(2)第３トレンチ西側土層
(3)第３トレンチ道遺構１、２石垣検出状況（東側より）
(4)「おかこい山」調査状況（西側より近景）
図版５　「おかこい山」出土軒丸、軒平瓦 …… 25
図版６　中津城石垣関係遺構 …… 26

第1章　はじめに

1）　地理的環境

大分県の北端に位置する中津市は、西を福岡県築上郡と接する県境の町である。福岡県とは山国川を狭んで地理的区画をなし、南に下毛郡三光村、東は宇佐市と接し、北に周防灘を望む。

市内の地形は山国川により形成された沖積面（中津平野）と開析扇状地（下毛原丘陵）により代表される。中津平野は直接海岸部にまで達っしており、山国川河口付近では扇状地性三角州を形成する。下毛原丘陵は海抜50～10mの高度を有し、海岸部へ向けて千分の4の傾きをもつ。その基盤となるのは豊前中津層と呼ばれる砂礫層からなる堆積面であり、この上に2～3m程の厚さでローム質のテフラが堆積している。尚、伊藤田から野依にかけてはAso－4の堆積が認められている。

沖積面（中津平野）は山国川本流の東側に広く分布し、旧流路、自然提防、浜提などの地形を明確に示す。旧流路はほぼ平野全体に数条の分布がみられる。また、現在の国道10号線に沿うようにして浜提が東西に延び、その前面に広がる後背湿地、干拓地などと、旧流路に伴う自然提防面を明確に分離している。

したがって、市域全体に占る山林の割合は極端に少なく、わずかに八面山（標高659m）から延びる山稜の一部をとり込むにすぎない。

2）　調査に至る経過

中津城は豊前中津藩の居城として、1588年（天正16年）に時の藩主黒田孝高により築城が始められた。その後、1600年（慶長5年）に黒田氏から細川忠興に藩主が代り、この細川時代に城郭および城下町の整備が終了したと言われる。

その後、小笠原、奥平と藩主が代り、最後の奥平昌邁の時、明治3年に廃城となった。廃城後周辺地域は中津の中心街として開発が進み、大きな変貌をとげた。特に内堀をはじめ、土塁としての役割を果した「おかこい山」など防衛施設は次々と姿を消した。

そうした中、昭和63年11月4日、中津市1301番地外に残されていた「おかこい山」を含む一角について、株式会社穴吹工務店によりマンション建設の計画が市教育委員会に提出された。これをうけて市教育委員会では、当該地区が内堀に付随した「おかこい山」としてはわずか3ケ所しか残されていない内の1ケ所であることと、城下町としての風情を残した景観地区であることなどから、業者に対し、建築規模の縮少と「おかこい山」の現状保存を求めた。同時に中津市文化財調査委員会に対し、中津市文化財保護条例（昭和52年7月4日条例第24号）第46条に基づき、保存に対する諮問を行なった。その結果、各調査委員より建物の高さの制限と、町並にマッチした外観、さらに計画変更による「おかこい山」の保存が答申された。これをうけて市教育委員会では12月24日、業者側と協議を行なった結果、業者側として①計画変更による「おかこい山」の保存は無理である。

②外観は城下町の雰囲気にあったものとする。③建物の高さは20m程度（7階）に抑える、との回答を得た。さらに、保存について協議を行なったが、業者としてギリギリの譲歩との態度を変えず、止むおえず調査を実施することとし、その結果をもって最終的な判断を行なうこととした。

また、当該地区のうち、「おかこい山」以北の場所については代々の中津藩家老家敷が存在しており、併せて確認調査を行なうこととした。

3） 調査の概要

通称「おかこい山」は、中津城とその城下の防衛施設として堀の内側に築かれた土塁である。江戸時代に描かれた数種類の絵図（注）によれば、その範囲は外堀の全域と内堀の一部におよび、中津の城下町がほぼ整備された17世紀中頃（小笠原時代）には完成していたものと考えられる。そのうち、島田口から大塚口に至る部分は旧大家川を利用して外堀としたため、土塁の規模は小さかったと考えられ、本格的な堀の掘割と土塁の構築が行なわれたのは廣津口から島田口に至る外堀と、西門から大手門に至る内堀部分である。こうして築かれた土塁のうち、現存するのは中津藩々主奥平家の菩提寺である自性寺付近から西堀端に至る部分（外堀）と、三ノ丁の松田歯科裏の部分（内堀）、さらに今回調査を実施した西門付近の一部分（内堀）である。西堀端付近については土塁上を日豊本線が通っており、往時を忍ぶことができる。

家老屋敷部分の試掘調査は昭和64年1月7日に重機によって行なった。調査の結果、表土下約40cm程で砂礫混りの面が検出され、これより上位は撹乱層であった。この砂礫層より下位は、砂層や礫層が交互に認められ、山国川の氾濫などによる堆積と考えられる。したがって、表土撹乱層下の砂礫層面が江戸期の生活面に最も近いと考えられるが、この面での遺構および遺物の検出はできず、家老屋敷などの遺構は近代以降の開発により消滅したと考えられた。

本調査は平成元年2月27日～4月9日まで行なった。調査の主眼は「おかこい山」頂部での建物遺構の確認と、「おかこい山」の構築方法の確認とした。したがって、「おかこい山」頂部に東西方向の第1トレンチを設定し、まず遺構の確認を行なった。その結果、「おかこい山」頂部には特に建物等の遺構は認められず、絵図などに見られるような立木等を植えただけの状態で土塁としていたと考えられた。

次に「おかこい山」の構築方法についての確認を行なうため、第1トレンチに直交して2本のトレンチ（第2・3トレンチ）を設定した。トレンチは丁度、「おかこい山」を分断する状態で設定し、これにより土層確認を行ないその構築方法の解明に努めた。

その結果、第2トレンチでは土塁をより堅固にするために大量の河原石（人頭大）を積んだ上に、これを覆うようにして土を盛り土塁としている状況が確認できた。言わば、土塁の"芯"として河原石を入れたと考えられる。

さらに、第3トレンチでは「坂道」と思われる遺構が確認された。詳細については後述するが、都合2回にわたる改修が認められ、その後、一時に埋められている。したがって或時期には「おかこい山」へ登る道として利用されたものの、何らかの理由により廃止されたと考えられた。

注　「中津城絵曲輪絵図」　1663年（寛文3）
　　「中津城下絵図」　1845年（弘化2）頃

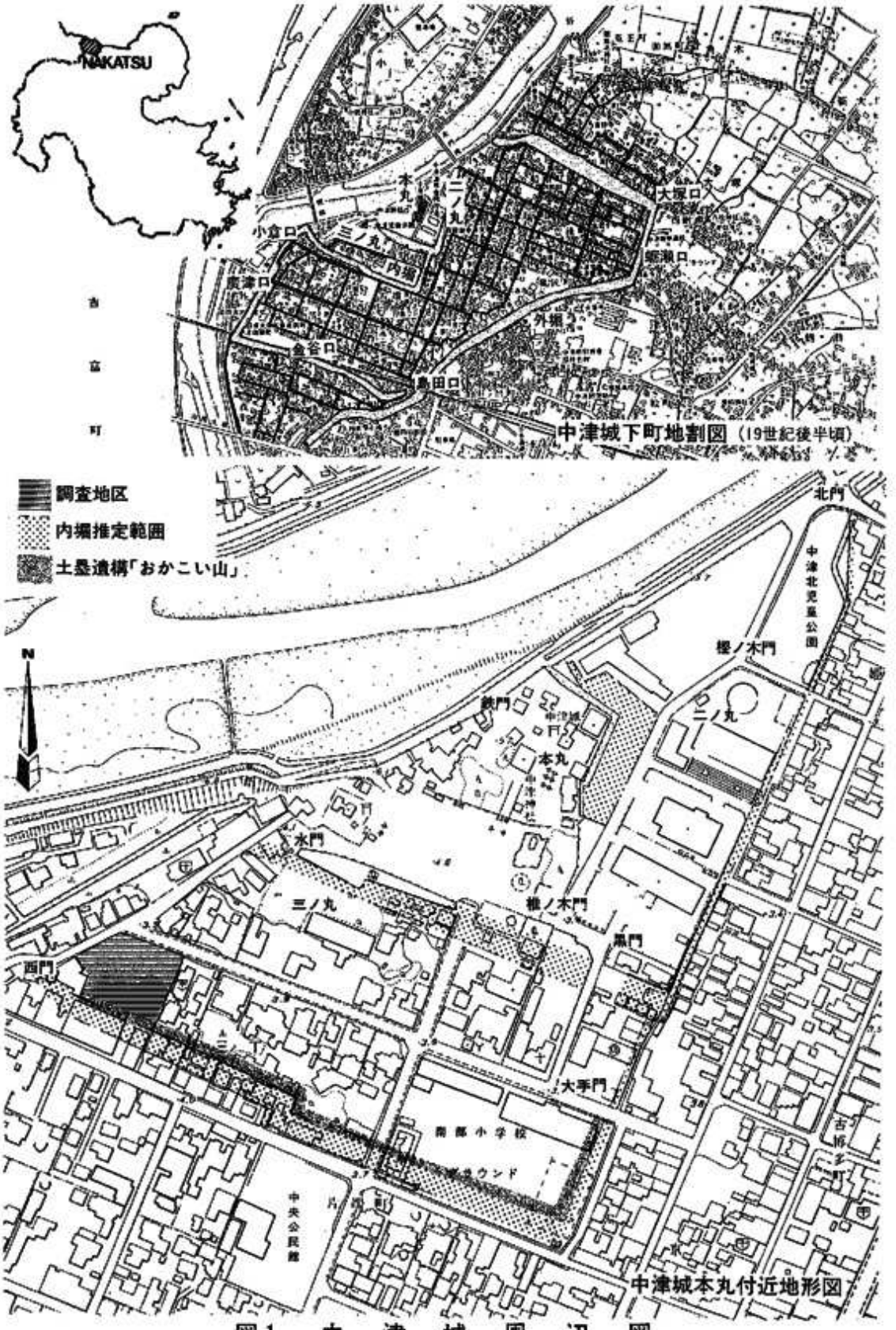

NAKATSU
本丸
二ノ丸
三ノ丸
内堀
外堀
小倉口
鹿津口
金谷口
島田口
大原口
鯉瀬口
吉富町
中津城下町地割図（19世紀後半頃）
調査地区
内堀推定範囲
土塁遺構「おかこい山」
N
北門
中津北児童公園
櫻ノ木門
二ノ丸
鉄門
本丸
水門
三ノ丸
椎ノ木門
黒門
西門
大手門
南部小学校
グランド
中央公民館
中津城本丸付近地形図

図1　中　津　城　周　辺　図

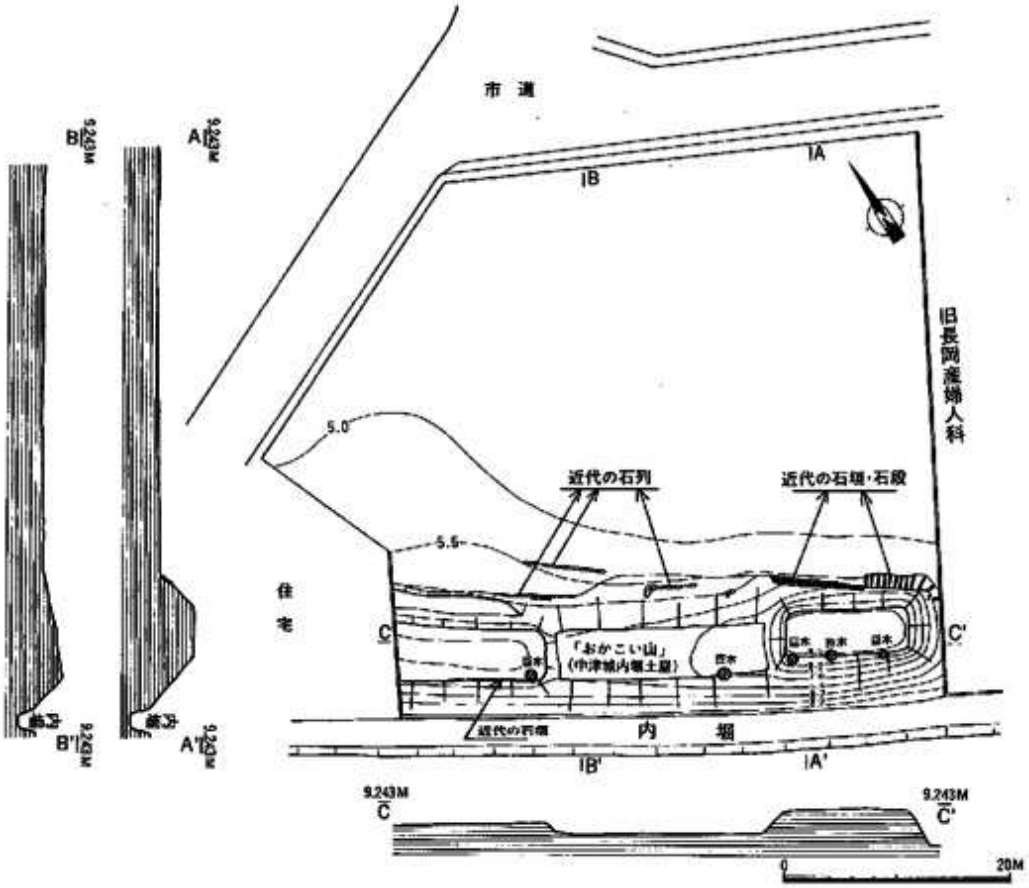


図２　「おかこい山」地形図及び断面図

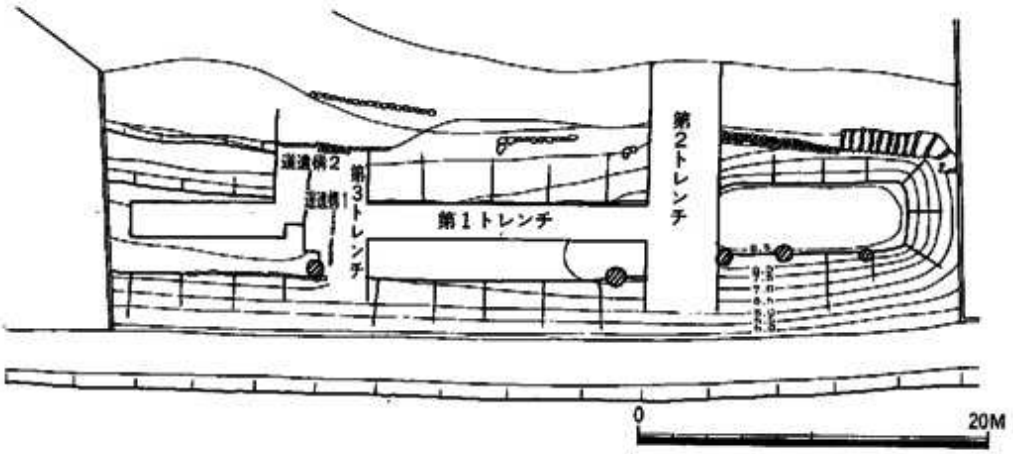


図３　「おかこい山」トレンチ配置図

第２章　　遺跡の調査

１）遺　　構

「おかこい山」（図２）

現存する規模は巾12m、長さ48m余りである。西側と東側は近代の開発により削平を受けており南側に存在した内堀も埋立てによりわずかにその名残をとどめるにすぎない。北側は当時中津藩の家老屋敷が存在したが、近代に宅化がなされており、明治以降、和田豊治の別荘が存在した。現況は中央部が１段低く、東側は2.2m、西側が１m程それぞれ高くなっている。和田豊治の別荘が造られた時期には庭園として利用されていたらしく、石造りの階段等、その造作の跡が認められる。しかし、大巾な破壊はされておらず、ほぼ土塁としての原型を保っていると考えられる。

第１トレンチ（図３）

土塁頂部に併行して２×31mの規模で設定した。表土層を除去すると砂質の茶色土が検出され、これが土塁の最上層である。調査では全体をこの面まで掘り下げ、遺構の検出に努めた。その結果土塁中央部の最も低い部分からは何ら遺構は検出されなかった。これに対し、土塁西側ではトレンチに直交した石列と、集石が検出された。石列は巾２m程で、人頭大の扁平礫を用い土塁上部にのみ認められた。また、集石については一部しか検出していないが、石列よりやや小さな扁平礫を不定形に敷き詰めていた。こうした遺構についてはその性格を明確にはしえなかったが、土塁構築にかかる何らかの遺構と考えるべきであろう。

第２トレンチ（図3．４・図版１．２）

第１トレンチに直行し、土塁中央部の最も低い部分と東側の最も高い部分を分断する形で設定した。４m×12mの範囲で掘り下げを行ない、主として土塁の構築方法の解明を目的とした。図４は

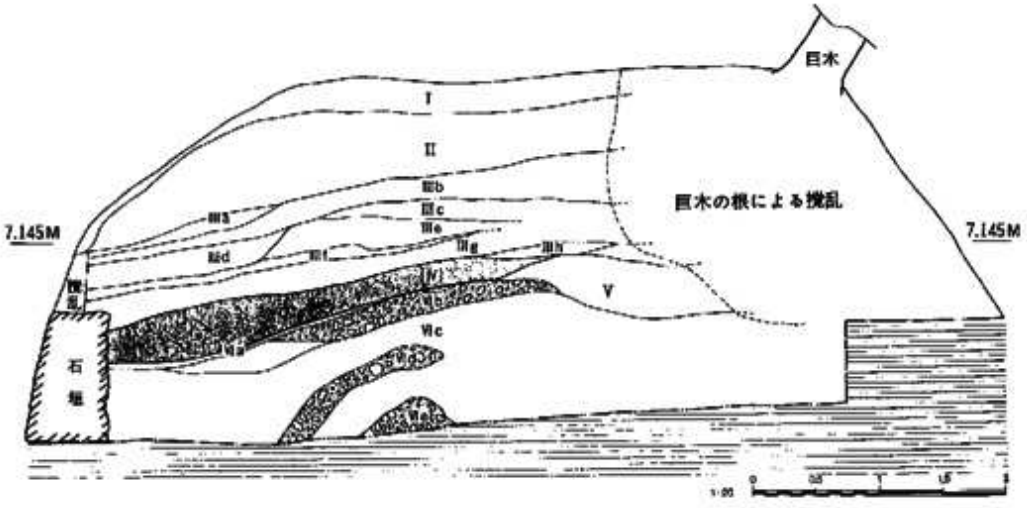


図４　第２トレンチ東側土層図

東側断面の土層図である。土層面をみると、概して2度に分けて土塁を構築したものと考えられ、土層および構築方法に差異が認められる。以下土層の特徴を記す。

Ⅰ層　暗茶色層。表土層であり、腐植土をベースとしている。

Ⅱ層　淡茶色土層。砂質の強いふかふかした土質で、拳大よりやや小さ目のレキを若干含む。

Ⅲa層　淡褐色土層。川砂シベースとしたザラザラした土質で、小石を多く含む。

Ⅲb層　淡灰色土層。川砂をベースとしており、Ⅲa層よりさらに砂っ気が強い。レキはあまり含まない。

Ⅲc層　淡灰色土層。Ⅲb層とほぼ同質の土質の土層だが、拳大のレキを多く含む

Ⅲd層　淡褐色土層。Ⅲa層に類似。

Ⅲe層　淡灰色土層。Ⅲb層に類似。小レキを多く含む。

Ⅲf層　淡灰色土層。Ⅲb層に類似。レキはあまり含まない。

Ⅲg層　淡褐色土層。Ⅲa層に類似。拳大のレキを多く含む。

Ⅲh層　淡褐色土層。Ⅲa層に類似。小レキを含む。

Ⅳ層　明茶色土層。明確に区分される層で、土層全体の中で鍵層となる層である。川砂をベースとしているが、鉄分を多く含むためかかなり固くしまっている。レキは多く含まず、Ⅰ～Ⅲ層群と下層を明確に区分している。

Ⅴ層　褐色土層。Ⅳ層とほぼ連続するレベルにあり、粗砂をベースとしている。レキはあまり含まず、Ⅳ層と同様に上・下の層群を区別する鍵層である。

Ⅵa層　明褐色土。鉄分を含むのかかなり固くしまっている。薄い層で、Ⅳ層よりもさらに硬い層である。

Ⅵb層　淡灰色土層。拳大のレキ層で、部分的にはレキの間がすいている。

Ⅵc層　茶色土層。砂質土をベースとし、小レキシかなり多く含む砂利層である。

Ⅵd層　淡灰色土層。部分的な層で、拳大のレキを主体とし、レキの間はすいている。基本的にはⅥc層と同一の層と思われる。

Ⅵe層　茶色土層。基本的にはⅥd層と同一であるが、レキの間に粘質土が入るためにやや異なる印像をうける。

このうち、Ⅱ層からⅢ層群は基本的には同一の土層であり、本来的には土塁の構築過程で生じた層序の分離であると考えるべきであろう。この下層のⅣ、Ⅴ層は全体の鍵層であり、Ⅵ層群との間を明確に区別している。Ⅵ層群もⅢ層群と同様に本来的には同一の作業による構築と考えられ、Ⅳ、Ⅴ層を境として両層群の構築時期には差異が認められる。さらに、Ⅳ、Ⅴ層より下位では「石積」が確認されている。これは土塁東側の高い部分から中央部の低い部分へと至る斜面に併行する形で構築されており、Ⅵ層群と接し、西側へ傾斜した状況を呈する（図版1－(3)(4)、2－(1)(2)(3)参照）。この「石積」は土塁中央部の低い部分にも連続して認められており興味深い。

第3トレンチ（図5. 図版3.4）

第1トレンチと直交し、土塁中央部の低い部分と西側の高い部分を分断する形で設定した。当初

は4m×8mの規模で設定したが、最終的には部分的に巾8mまで拡張した。

第3トレンチからは道遺構（坂道）が2条検出され、併せて土層面の観察により東側土壁土層面との比較を行なった。図5はそれら遺構と、土層断面の状況を示したものである。道遺構1.2はほぼ併行した状態で検出され、土層もほぼこれに対応した状況を示す。

西側および南側土層断面

Ⅰ層　暗茶色土層。表土層で腐植土をベースとする。

Ⅱ層　淡褐色土層。細かな砂質土をベースとし、小レキを若干含む。

Ⅲ層　黒色土層。細かな砂質土で、レキなど不純物を全く含まない。上面は道遺構2が廃棄された後の生活面か？。

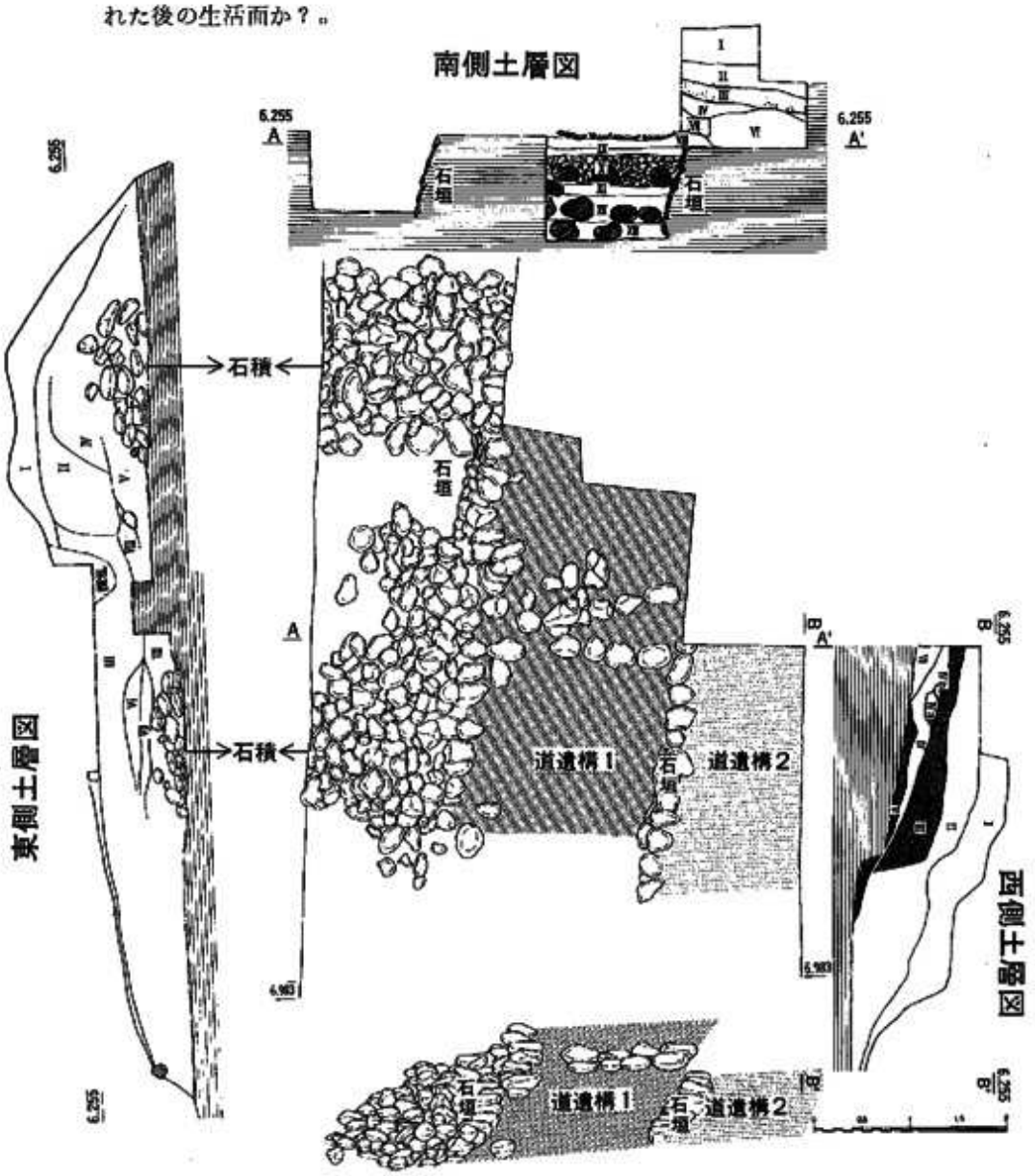


図5　第3トレンチ遺構実測図及び土層図、見通し図

Ⅳ層　淡褐色土層。砂質土をベースとし、小レキを含む。

Ⅳａ層　淡褐色土層。Ⅳ層に類似した土質だが、やや明るい色調を呈す。

Ⅳｂ層　淡褐色土層。Ⅳ層に類似するが、やや暗い色調を呈する。

Ⅴ層　暗茶色土層。砂質土で不純物を全く含まない。道遺構２の生活面と考えられる。

Ⅵ層　淡褐色土層。砂質土をベースとし、小レキを多量に含む。

Ⅶ層　暗茶色土層。砂質土で不純物を全く含まない。Ⅴ層に酷似する。

Ⅷ層　茶色土層。砂質土でⅤ層に類似するが、やや粘質が強い。道遺構１の生活面と思われる。

Ⅸ層　淡褐色土層。砂質土で小レキを含む。Ⅳ層類似。

Ⅹ層　レキ層。拳大のレキが主体で、下部には人頭大のレキが並べられている。明らかに人為的なもので、道遺構１の基礎工事によるものかも知れない。

Ⅺ層　褐色土層。粗い砂利層で、褐色土（砂質）をベースとし、小レキを多く含む。

Ⅻ層　レキ層。人頭大のレキで構成され、間に褐色土（砂質）が入る。Ⅹ層と同様に計画性が強く、道遺構の構築過程を知る上で興味深い。

XIII層　明褐色土層。砂質だがマサ土に近い土層。人頭大のレキを含む。

東側土層断面

Ⅰ層　表土層。

Ⅱ層　淡茶色土層。砂質でレキなどは含まない。土塁内側では区別がつかない。

Ⅲ層　茶色土層。砂質土でレキなどは含まない。全体に安定的で、土塁中央部を構成する主要な土層である。

Ⅳ層　暗茶色土層。ふかふかしたクロボク土に近い土質。

Ⅴ層　黒色土層。Ⅵ層に近いがやや暗い色調で、褐色ブロックを含む。

Ⅵ層　淡茶色土層。Ⅱ層類似。

Ⅶ層　暗茶色土層。砂質が強く、Ⅵ層に対し暗い色調を呈する。

Ⅷ層　暗茶色土層。砂質土をベースとし、粒子は粗い。レキなどは含まない。

このうち、主体的な層はⅡ～Ⅴ層であり、他は部分的なブロックと考えられる。

道遺構１、２

トレンチ両側で併行して検出された。状況からすれば道遺構２が廃棄された後に道遺構１が構築されたと考えられる。規模は１が巾２ｍ、延長６ｍ程で、２が巾1.5ｍ＋α、延長3.5ｍ＋α、傾斜角は各々９°、27°である。さらに、東側には石垣が築かれており、土塁西側との関連を強く示唆している。また、各々の路面をすると、道遺構１が拳大のレキを敷きつめているのに対し、２では土をつき固めた「土間」状であり、各々の規模は類似するものの、構造上若干の差異が認められる。

尚、トレンチ南側と北側では第２トレンチで認められた「石積」遺構が検出されており、こうした施設が土塁崩壊防止の機能を有し、土塁全体に連続して構築されたことを示している。

2）遺　物

今回出土した遺物はほとんどが表土中、もしくは表採である。これは土塁という遺構の性格によるもので、土塁中からは全く出土していない。したがって、そのほとんどは土塁内側に存在した家老屋敷に関連するものと考えられるが、少なからず「おかこい山」との関係を指摘しうると考え、図示した。

陶器類（図6）

1は伊万里系の白磁茶椀で外面には草木文を配する。口径7.6cm、器高3.7cm。2は伊万里系の白磁蓋で、やはり外面に草木文を配する。口径7.0cm、器高2.6cm。3はくらわんか椀で、見込に五弁花文コンニャク印判を配し、外面は染付文様を施す。4は伊万里系の白磁皿で、内面には鶴と松竹梅の文様をあしらう上手物である。5は白磁の蓋で、外面には蝶と草木文様を配し、内面外周には斜格子と「✚」印を組合せ、中央には水草様の文様をあしらう。口径10.6cm、器高3.0cm。6は伊万里系の白磁皿で、内面には花文様をあしらう。高台は無釉。7は白磁の合子で、外面には丸透しで「壽」の文字を1＋7で円形に配する。口径5.4cm、器高1.4cm。8は伊万里系の青磁蓋で外面には花文様をあしらう。口径5.1cm、器高1.8cm。9は唐津系の蓋で、外面は緑色の釉を施すが内面は無釉。口径9.6cm、器高3.3cm。10は土師質の小皿で、底部には糸切離し痕がみられる。底面はやや上げ底気味で口縁はやや外反する。口径9.8cm、器高1.3cm。11は伊万里系の白磁皿で体部は口縁近くで大きく外反する。無文様で、内面見込は蛇の目状に釉剥ぎされている。口径14.8cm、器高4.4cm。12は高取の茶椀で、高台付近は無釉。口径11.0cm、器高6.5cm程度。13は弓野山窯の製品で、器形は不明だが内面に重焼痕が認められる。内、外面二採唐津。14はやはり弓野山窯の徳利で、外面二採唐津。

これらのうち、5は19世紀代と考えられるが、他は概ね18世紀後半代と考えられるものである。4、12を除いて日用の雑器類が多く、家老屋敷との関連は強くイメージし難い。時期的には奥平家の領有の時期であり、慢性的な財政難に陥っていた中津藩の状況を端的に反映していると言えるかもしれない。

瓦　類（図7.8）

出土した瓦は軒丸、軒平瓦の他、丸瓦、平瓦など多量に認められている。ここでは軒丸、軒平瓦の主要なものについてのみ図示し、解説したい。

軒丸瓦は概ねA類（1～6）とB類（7～11）に区別される。A類はやや大型のもので、瓦当径が平均（推定値を含む）で15.6cm、珠文数15～20個で、巴文は右方向と左方向の両方が認められ尾はいずれも大きく後方へ流れている。珠文は概ね大き目だが1、6はかなり小さい。B類はやや小型の一群で、瓦当径が平均で13.9cm、珠文数12～16個である。巴文は両方向が認められ、尾は大きく後方へ流れる。9は巴の頭が接しており他に対して異質である。珠文は10以外は大き目でA類と共通する。A・B類とも全体の構成に大差ないが、B類に茶色の色調のものが多い。

軒平瓦は2点のみで、12は逆向きの三葉と均正唐草文の組合せ、13は米印の上半分を中心飾とし均正唐草文と組み合せている。

こうした瓦類はほぼ18世紀代以前の所産と考えられ、家老屋敷に使用された可能性が高い。

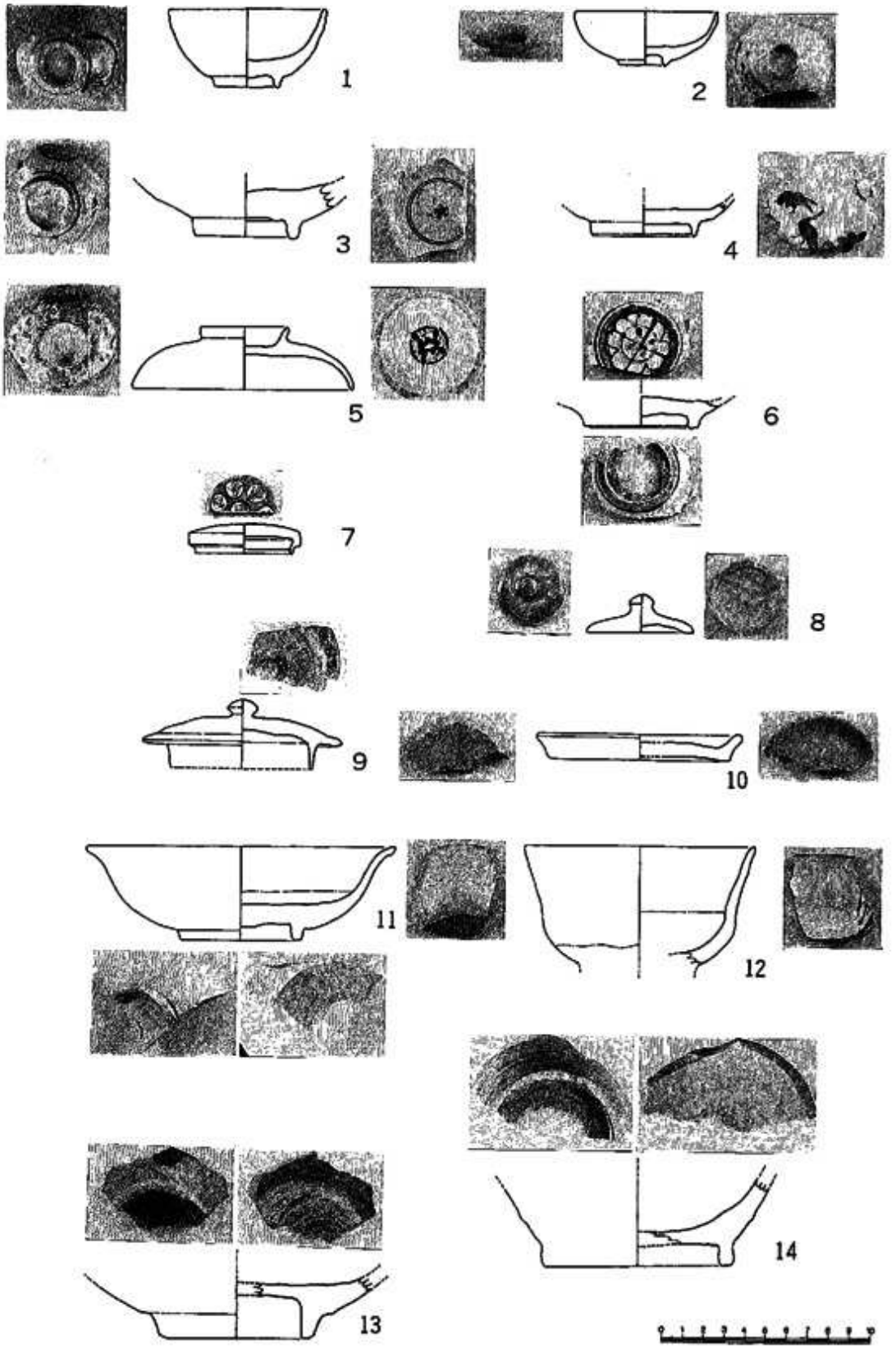


図6 「おかこい山」出土遺物実測図

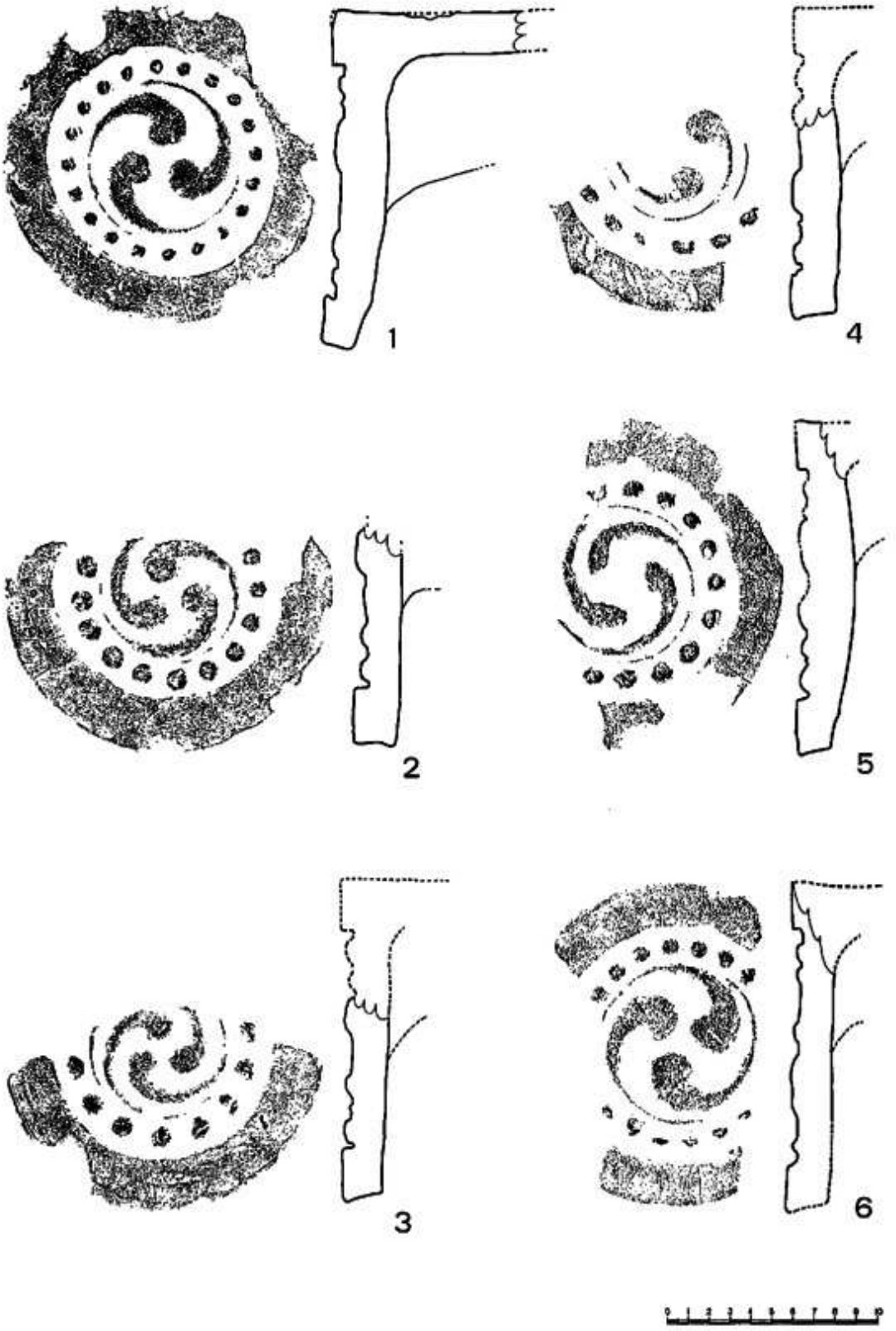


図7 「おかこい山」出土軒丸瓦実測図

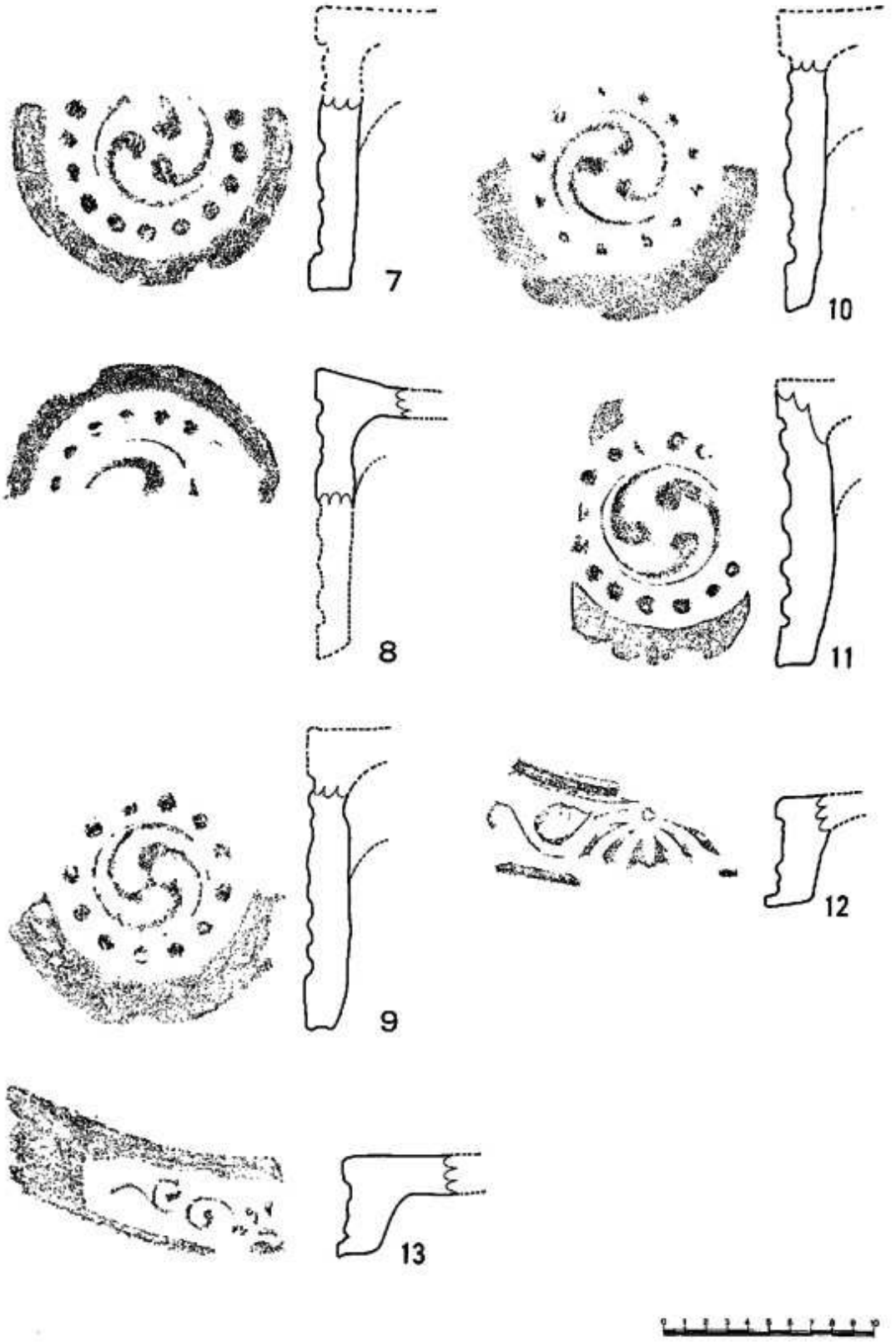


図8 「おかこい山」出土軒丸・軒平瓦実測図

3）ま と め

今回調査を実施した西門東側の土塁（通称「おかこい山」）についてみると、現状規模は基底部巾12m、頂部巾5m、高さ3m程度で断面台形状を呈する。これから推定しうる土塁の当初の規模は基底部巾7間、頂部巾3間、高さ2間程であったと考えられる。記録によれば内堀の巾が8間であったから、[注1]これを含めた防衛施設の巾は15間に及び、内堀底面からの高さは4～5間程度であったと考えられる。また、現状をみると中央部が1段低く、東側が2.2m、西側が1m程高くなっている。これは絵図[注2]に見られる状況と一致しており、また、土塁上に繁茂していた樹木が200年以上の樹令をもっと考えられることなどから、現況は「おかこい山」が土塁として機能していた当時とほぼ変更がないものと考えられる。

次に、土塁の構築方法について触れてみたい。前述の通り、第2トレンチ東側土層面でみると、土塁は2回に分けて構築されたようである。これが時期差なのか工法上の都合によるものか明確にしえなかったが、上層群（Ⅲ層群）と下層群（Ⅵ層群）で土の堆積の傾斜が異なることや、土質に差異が認められること、さらに下層群に接して「石積」が伴うことなどから、両者は連続して構築されたのではなく、まず下層群から中央の低い部分へ連続するレベルで構築された後、ある程度の期間をはさんで、上層群によって構成される部分が構築されたと考えたい。また、土塁の構築手法についてみると、土層面を見る限りでは土質の異なる土をある程度交互に用い、版築による構築を意識したのではないかと考えられるが、厳密には版築による構築とは言い難いようである。それよりもむしろ、「石積」の存在に注目したい。「石積」は人頭大の河原石を大量に用い、少なくとも今回調査を行なった土塁の延長20m以上にわたって認められており、恐らく内堀に付随する土塁内に延々と築かれていたと考えられる。その規模は最小で底部巾1.5m、高さ1m、最大で同4mと2mの山形の断面形を有し、続延長は400m近くに達すると推定される。材料となる河原石は近接する山国川の河床から無尽蔵に供給できたと考えられるが、その労力は計り知れない。したがって、その耐久性は強く、それゆえに現代まで自然崩壊することなく遺されてきたと言えよう。

最後に、道遺構1、2についてその用途を考えてみたい。道遺構1、2については最大40cm程のレベル差があるものの、基本的には西門と付随する橋を意識して造られたと考えられる。それぞれの構築年代については明らかにしえなかったが、第3トレンチ西側土層をみると道遺構の生活面より上層（Ⅱ層）が人為的に一括で埋められた状況であることからすれば、土塁構築当初にはすでに存在し、その後道遺構2の廃棄後、1が構築され、さらに或時期に廃棄されたと考えられる。とすれば、細川時代にほぼ城下の整備が完成したとされることから、道遺構2は細川時代、1は次の小笠原時代、そして奥平時代に至り廃棄され埋め立てられたのかもしれない。その理由は恐らく西門周辺の改修ではないかとみられるが、明確な記録は残されていない。（第3章参照）

以上、今回の調査についてその成果を述べた。すでに述べた通り、中津城については近代以降の開発によりその遺構の多くが何ら調査もなされないままに消滅している。本書がそうした現状を少しでもカバーし、今後の近世中津の研究に多少なりとも活用されれば幸いである。

注1.　「豊前国中津城郭波し覚」　　1845年（弘化2）

注2.　「中津城総曲輪絵図」　　1663年（寛文3）

第3章　中津城の沿革

(1) 中津城と城下町の形成

豊前国の中枝地<中津>は、中津宮鎮座の地で、古代には「中津島」・「中津江」といっていた（「大中津志」所収「中津諸誌」）。荘園制のころ、この中津江の地には、荒巻・玉握・久金の3つの荘園があり、この3荘が、のちに上小路・中小路・下小路となった。上小路は今の金谷あたり、中小路は諸町・新魚町あたり、そして、下小路は船町・出町・下正路あたりである。

南北朝期（1334～93）の人に中津江太郎という人がいた。この太郎判官孝範は、中津川大家郷に丸山城を構営し、これを居城としていた。そして、重松・橋本・矢野・田中氏など、中津の5名主が交代で城番をした。

秀吉の天下統一に最後まで抵抗する薩摩の島津義久を討つため、大友氏・毛利氏に加えて、軍奉行黒田孝高を派兵し、自らも15万の兵を率いて九州にはいった秀吉は、平定後、天正15年（1587）、博多箱崎で九州の国割を行なった。同年7月3日、黒田孝高は、豊前の京都・築城・仲津・上毛・下毛・宇佐の6郡を秀吉から与えられ、播州播磨から入封した。その支配総石高は、12万石とも12万5千石、15万石、16万石、18万1千9百石ともいわれ、表高・実高による差異はあるにしても、諸説あって定かでない。

孝高は、はじめ時枝城（宇佐市）にはいり、領内仕置の3か条を発し、検地に着手した。そして、同年8月12日の時点では、孝高は築城郡八田（椎田町）の法念寺を仮の住居とし、嫡子長政が京都郡の馬ケ岳城（行橋市）にはいっている（『黒田家譜』。）

同年9月、肥後の佐々成政が領内に強行した検地に肥後国人らが抵抗、秀吉からこの反乱鎮圧を命じられ、その援護に出向いた孝高の虚を衝いて、宇都宮鎮房と野仲・福島・加来氏ら豊前国人衆が反乱を起した。肥後出向の途次、筑後久留米でこの報に接した孝高は、急いで自領へ引き返し、留主を守っていた長政とともに、同年12月末には上毛郡のH隈城（新吉富村）・高田城（豊前市）・福島城（田丸城、中津市）・加来城（大畑城・同）など、豊前国人衆の城を次ぎ次ぎに攻め落した。そして、反黒田の盟主宇都宮鎮房は、黒田とひとたび和睦して城井谷の茅切城（築城町）を出て、寒田の館に移った。

明けて天正16年（1588）正月、孝高は、中津にはいり、ひとまず、古博多町の豪商伊予屋弥右衛門の宅を本陣とした。伊予屋は、のちの細川時代に、屋号を鳴屋と改め、奥平時代には町年寄を代々勤めた豪商である。

孝高は、間もなく、中津の北方、海に近い大塚山の地に、仮の館を建てた。今も大塚の畑地に「如水井」と伝えられる4角の石組みの井戸があって「天正」の文字が刻まれていたというが、永年の風雪に、すでに文字が消えてしまっている。ここが仮館の跡といわれている。

孝高は、間もなく、中津江太郎の居城であった丸山城を修補し、入城することにした。「城は掻き上げばかりにて、土手に松など植え置かれし由」と、「閑居草庵記」（「大中津志」所収）に記録されているように、丸山城の修補は、掻き上げにすぎず、土手に松木などを植えた程度であった。

城郭・櫓などの修補にも、古材木を使った証しの貫穴などがあったという。水門の棟札には、本丸・水門は広津城（吉富町）から移した、と記していたといわれる。大手門は、反黒田の国人で、黒田に亡ぼされた犬丸越中守清俊の犬丸城（中津市）を壊して、その古材木を使っていたという。孝高は、このように丸山の城には金をかけずに、わずかに修補して居城としたにすぎなかった。

＜黒田如水縄張＞という中津城の縄張りを画いたものが、管見の限り４点ある。臼杵市立図書館に２点と、大分県立図書館に１点、耶馬渓口林＝中根正彦氏所蔵の１点である。ここには、そのうち、臼杵市立図書館の一つを示しておく。（図９）

周防灘に注ぐ高瀬川（山国川）河口の右岸に位置する丸山城を基城とした「黒田如水縄張」によると、中津城は本丸・二の丸・三の丸を添えた梯郭式で、その規模は大きくない。城下の固有な町名としては、「京町」・「博多町」がみえ、ほかに、「町」が４カ所に散見する。そのほか、「侍屋敷或町屋」、「寺モアリ」と記されている。地名としては、「高瀬」・「犬丸」・「コイワイ」（小祝）・「竜王之濱」がみえ、川として、「高瀬川」（山国川）・「ヤックワン川」（駅館川）、山として、「弥山」（八面山）が散見する。図中に「京泊」と「番所」があるのが興味深い。「京泊」という港は、入江となっていた所で、京坂往復の船泊りである。高浜京泊の西北方の出鼻を、今も「番所の鼻」といっている。ここは、もと遠見番所のあった跡である。

貞享３年（１６８６）の「高浜論所一件」によると、番所の小舎が造られたのは小笠原長次の時代で、それまでの黒田・細川時代は役人が船に乗り、自分で遠見の番をしていた、とある。図中に、「京泊」があり、「番所」の小舎が明確に画かれているので、年代がはいってないこの絵図は、もしかすると小笠原長次の治世以降に作成したものかも知れない。しかし、「高浜論所一件」が、後年に記されたものであるので、この絵図を黒田如水当時のものとすると、「番所」の初設を如水期まで遡ることができる。明確には断定できないが、興味の残る絵図である。なお、「京泊」は、如水期に設けられており、朝鮮出兵への黒田軍の発進港でもあった。

図中には、このほか、口屋（口屋門）として、「堀川口」がみえる。大分県立図書館架蔵の「豊前中津之城図一黒田如水縄張」には「海津口」も散見する。道路としては「小倉道」がみえる。

孝高が中津入りした天正１６年の２月には、秀吉の命で、肥後国人反乱再燃の弾圧に、上使として出発している。そして、同年４月には、反黒田の豪主宇宮鎮房を、和睦と称して中津城中の春賀の宴に招いて謀殺した。

同１７年（１５８９）５月１５日、孝高は剃髪して如水円清と号し、家督を長政に譲った。同１９年（１５９１）、秀吉は、朝鮮出兵のために肥前松浦に名護屋を構築することを企て、如水に縄張り作成を命じた。如水は、当代屈指の築城家として広く知られていた。秀吉は、長政に惣奉行を命じ、１０月に着工し、翌文禄元年（１５９２）２月に完成した。

関ケ原の役後、中津城にいた黒田長政は、筑前一国５２万３千石を与えられ、慶長５年（１６００）１２月１１日、父如水とともに名島城（福岡市東区）にはいり、そして、同７年（１６０２）、築城なった福岡城に移った。

慶長５年１２月２６日、黒田の転封のあとに、旧領の豊後国速見郡６万石に、新たに豊前一国（規矩・京都・田川・築城・仲津・上毛・下毛・宇佐）と豊後国国東郡を合わせた３０万石（実高３

9万9599石6斗）の領主として、細川忠興が丹後宮津（京都府）から中津に入封した。

忠興は、領国支配にあたり、国割とともに城割を行なった。入封以前百数十の土豪らの城砦があったが、忠興は小倉城・門司城・龍王城・高田城など九城を残して修復・普請し、他の城砦をすべて破却し、黒田時代に発生した城井氏らの国人層による反乱の再発を防止しようとした。国割にあたって、忠興は、弟の興元を小倉城代としたが、大名になれなかった不満から、興元は、慶長6年12月に大阪で出奔した。

中津は、豊前・豊後に広がる細川藩領域の中間点に位置し、領国支配には適していたが、この興元の出奔を契機に、忠興は、小倉城に本拠を移すことを決意した。慶長7年1月15日、小倉城構築の鍬入れが行なわれ、城下町の建設も急速に進み、同年11月中旬に一応完成、下旬に中津から小倉に入城したのである（「細川藩譜便覧」、永青文庫）。

忠興は、中津城を二男興秋の居城としたが、三男忠利が継嗣と決まると、興秋は証人として江戸に赴く途中で出奔し、京都で剃髪した。そのため、一時、志水宗加が中津城を預かったが、まもなく忠利が正式に中津城にはいった。

忠興は、香春岳城には中務少輔孝之（忠興の弟）、田川岩石城に長岡忠直、下毛一戸城に荒川輝宗、龍王城に細川幸隆（忠興の弟）、高田城に有吉立行（家老職）、木付城に松井康之（同）を、それぞれ城番として配置した。

小倉城の増改築が完成したあと、忠興は、中津城の増改築にも着手したようである。中津城三の丸の西門の石垣に、「慶長12　9月」という文字が刻んであったという。8年後の元和元年（1615）の一国一城令に際して、忠興は中津城の普請を中止するように忠利に伝えている。

これらのことを考え合わせると、中津城の増改築は、最初、西門のある三の丸の拡張工事など、城の内部の外側の工事から始めて、三の丸の拡張工事が慶長12年9月に完成したと考えられるのである。

元和元年閏6月13日、幕府は、一国一城令を発布した。この一領国一城の制限令（「諸国城割の触状」）が、閏6月29日、忠興のもとに到着した。忠興は、領内の門司城以下、香春岳・岩石・一戸・龍王・高田・木村の各城の破却を命じた。しかし、忠興は、中津城をなんとか残そうと考えていたようで、在府中の忠利に、老中土井利勝と相談するように、という書状を送っている。翌元和2年（1616）、中津城の残置が決まり、忠興は本多正純・本多正信・土井利勝ら幕閣に礼をいうように忠利に指示している（『細川家史料』）。

忠興は、元和6年（1620）閏12月25日、三男忠利に家督を譲り、剃髪して三斎宗立と号した。翌7年正月2日、忠利は家督継続のお礼言上のために江戸に到着。7日に登城して将軍秀忠に拝謁し、2月に帰国した。三斎は4月に江戸に発ち、隠居城として修復中の中津城にはいった。家督を継いだ忠利は、6月23日小倉城に移り、8月朔日に国受け取りを済ませた。

一方、修補中の中津城は、同年9月下旬、上坦書院・数寄屋などの普請が完成した。材木を八山（八面山）から伐り出し、石垣に使用した石は、小隈（雄熊）・日隈（姫熊）に散在した古墳の石組みを壊してこれにあてたものである。

三斎の隠居城として修復・完成をみた中津城は、木丸・二の丸・三の丸と八門（椎木・水・鉄・

黒・樫木・大手・西・北の各門）２２の櫓を内郭として備え、城の外郭として西に広津口・小倉口、南に金谷口・島田口、東に蛎瀬口・大塚口の６口、さらに海浜に船宮口を設け、深い外濠・土塁をめぐらせた。それぞれの口には番所を設け、番士２人、下士２人、鉄砲足軽２人、計６人を置き、出入りを監視させた。

三斎は、城の修復・整備とともに、中津城下の町割の令を出し、十助堀を埋めて新博多町を作った。そして、この町割のとき、新博多町・古博多町・京町・米町・姫路町・豊後町・新魚町・角木町・諸町・塩町・瀬川町・舟町・古魚町・桜町の１４町と枝町、侍町（武家町）の祖型ができたものと思われる。三斎は、また、金屋堤を築き、さらに、大家川の川原の一部を埋めたて、島田・中殿・牛神・蛎瀬に接する土地を農地として開発した（『中津市史』）。

「部分御旧記」（熊大・永青文庫）には、「中津御領分」・「中津御蔵納」などと見え、「木藩年表」（永青文庫）が、忠利の藩主就任の元和７年から始まっていることからも、本藩は小倉領と認識され、三斎の蔵入地ならびに三斎付き給人知行地は中津領として、忠利の小倉領とは分離した存在であった。三斎の隠居料は３万７０００石、中津給人の知行高４万２０９３石、合わせて７万９０９３石が中津領であった（「細川藩譜便覧」）。

寛永９年（１６３２）１０月４日、細川三斎・忠利父子が、肥後５４万石の藩主として熊本に転封したあとに、同年１０月１１日、小笠原長次が、播磨国（兵庫県）龍野六万石から２万石の加増をうけて中津８万石の藩主として入封した。

細川期に、１４町が形成され、近世地方都市の祖型ができた城下町中津は、小笠原期整備・拡張された。承応元年（１６５２）３月、藩は、町奉行沢渡志摩、大工頭内海作兵衛、町人掛古田屋治左衛門・豊後屋太郎右衛門らに命じて、樋を市街に埋めさせ、高瀬川（山国川）の水を高瀬の川上で取水し、藍原村から城下へ水を通す水道工事を実施させた。

寛文３年（１６６３）の小笠原期「中津城絵曲輪絵図」（庄家文書）には、城下１４町のほかに下小路町・留守居町・カコ町・弓町・中間町・持筒町・鉄砲町・鷹匠町・寺町・侍町がみえる。

「惣町大帳」安永４年（１７７５）の条によると、小笠原期に、藩は新博多町の勢留に、新しく土蔵を作るため、沼田であった門外を開発し、新博多町支配出小屋という門外町を作り移住させた、とある。また、藩は塩町に武家屋敷を増やすため、門外の蛎瀬に、塩町の９軒１２竈（戸）の町人を移住させ、塩町支配蛎瀬新町を作った、という。同様に、米町支配鍛冶屋が蛎瀬新町に南接して作られ、城下から米町の職人たちが移住させられた、とある。享保元年（１７１６）の「中津町々軒数之覚」（姫路市・庄家文書）には、（表１）のような内容の出町５町の軒数報告が、１１月の月行事である古博多町から行なわれている。

前掲の「中津城絵曲輪絵図」に添記された押紙によると、寛文７年（１６６７）にも、中津城を修築している。破損部分は、石垣の崩れ個所が本丸の南東角櫓下、３の丸の西方侍屋敷塀、大手口南の角塀下である。石垣のはらみ個所が、本丸の北方川端の櫓下、北の門角櫓下。それに、北東の角櫓一カ所が、先年焼失したままになっているのを復元したいと幕府に願い出ている。

天和３年（１６８３）、中津城の城門・水門・櫓を普請した記録が残っている。古表神社（築上郡吉富町）に、「奉寄進秘密御社」とした小さな社が保存されている。社の内面に、「右之寛趣、

御城門・水御門・御矢蔵御普請ニ付……」と、造営の息災安全を祈って寄進したと書かれている。

貞享3年（1686）3月26日、城内上壇の奥殿・櫓を半焼。『中津米山記』に、「同月23日夜、月の山はじめ頃に、中津城中御寝所より出火にて、細川三斎公の物数寄の亭・櫓・築山・泉水の名木・名花・名物の重宝数を尽して焼失す」と記している。元禄2年（1689）正月、焼失した個所の再建を幕府に許されて復元した。

享保元年（1716）9月6日、小笠原長邕が7才で病死した。世嗣断絶のため、領地没収となった。

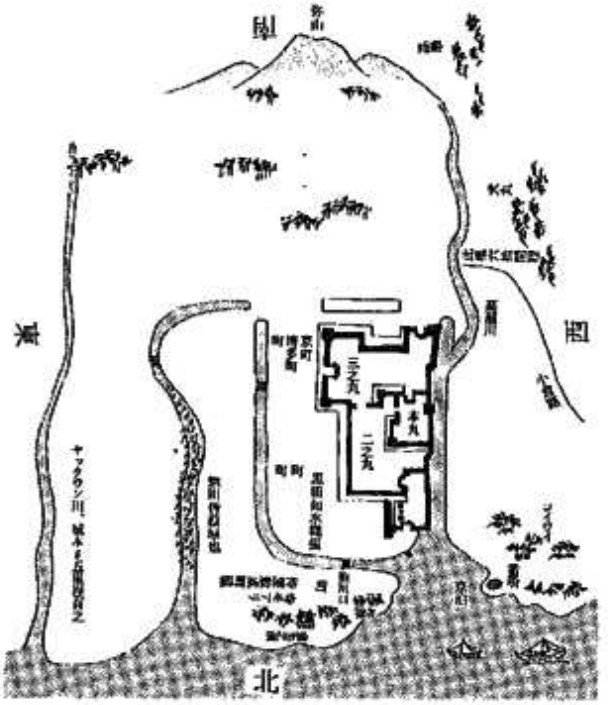


図9「黒田如水縄張」（白井市立図書館蔵・絵図より製図）

中津の城下は、屋敷町20町と中津町14町で構成され、枝町6町を含めて城下町を形成した。そして、小笠原期の10人組制度を5人組制度に改組し、城下14町を6町組に編成して6人の町年寄を新たに任命した。屋敷町は武家屋敷が中心で、中津町は商人と職人の町であった。

奥平期の元文2年（1737）11月1日、本丸西方、鉄門の上の二重櫓から出火。櫓に収蔵していた煙硝が大爆発して、番人の足軽・中間の6人が即死、多数の負傷者を出した（『四日市村年代記』・『中津藩史』）

文久3年（1863）8月、江戸藩邸より帰国の藩主・子女のために、本丸の下段西側に新殿を建築して「松の御殿」と称した。この松の御殿は、明治4年（1871）7月の廃藩置県後、9月23日、居住していた子女を片端町立木深邸に移住させ、旧藩庁の残務取扱所とした。翌5年2月朔日、閉庁、小倉県千束・四日市両支庁を廃して、中津三の丸の奥平与四郎邸に仮庁を置き、のち、旧藩庁跡の松の御殿に小倉県中津支庁が置かれた。小倉県から大分県支庁を経て、明治10年（1877）3月31日の夜、西南の役に呼応した中津の志士増田宋太郎らが支庁を襲い、火を放って松の御殿は焼失した。

明治2年（1869）10月26日夜、西門に近い陣道具を収蔵する櫓に、藩士某が放火。陣道具櫓を焼失した。

その後、本丸は中津公園地となり、城濠は多く埋められて、その跡はほとんどない。本丸と三の丸の堺の石垣は、割溝を道路に改造した際に、公園地入口の部分を崩し、戦後、六・三制学校教育による新制中学校（五中、のち城南）建設の際に、公園入口より東側の石垣を崩して平地にした。

(2) 中津城の構造

(A) 内　郭

内郭の北方、北門通りを起点に、二の丸と姫路町・京町の間を南方に、大手門前を通って西へ曲がり、片端町を通って西門に至る間は濠をめぐらし、掘りあげた土を高く盛りあげて土塁とし、その上に樹木を植えた。土塁の規模は、二の丸側土手根幅六間、高さ七尺、三の丸側土手根幅八間、高さ八尺である。これを「おかこい」といった。

片端町側の濠は、慶応年間に埋められて屋敷地となった。西門から北方に三の丸・本丸、また二の丸の北門通りに至る高瀬川（中津川）の川沿いは、石垣の上に白壁をめぐらし、壁の内に松木を植えた。

記録に残る内郭の構造は、次の通りになっている。

◆本　丸……内郭の北東方石垣下二の丸側に薬研堀を配し、石垣の上に白壁をめぐらせて所々に多聞櫓を配した。北方の一段高くなったところを上壇と称して、ここに奥殿を設け、後庭に能舞台を設けた。奥殿の上屋には、黒田家の黒丸、小笠原家の３階菱の棟瓦が所々に残っていたという。

南方の一段低くなったところを下壇と称して、表書院・広間・詰所・政殿・片舎を配し、表書院の前庭には、今に残る泉池を作って、藍原の大井手より石樋を埋め、水を城内に引きいれた。

南方三の丸との界には石垣を築きあげ、三の丸側に濠を配した。本丸の周囲は石垣で囲い、椎木門・水門・鉄門で二の丸・三の丸に通じた。

◆二の丸……本丸の北東方の石垣下に薬研堀を配し、その北方にお花畑を作り、東方の東側、南方の三の丸に通じる黒門の内に三所神社・祈祷所・長福寺（以前の光久寺・観音院）を配し、寺の後方に藩庁の厩舎と馬場を作った。この馬場を内馬場といって、藩主・上士の乗馬練習の馬場であった。

◆三の丸……京町横丁から大手門をはいり、三の丸内に蔵屋敷、大身・上士の屋敷を西門まで構えた。

中津城の内郭・門・櫓は、次の通りであった。

1. 本丸の広さ　５００５坪　南平　東西８８間余
　　西平　南北１００間程
　　北平　東西２８間余
　　東平　南北７８間余
1. 二の丸の広さ　５４４４坪　東西４３間半
　　南北２３４間
1. 三の丸の広さ　１１３５７坪　東西１６１間余
　　南北７８間余

内濠二の丸６４１坪
三の丸８４０坪

総面積２万３２８７坪　土地２万１８０６坪
内濠　１４８１坪

1. 門

木丸に椎木門・水門・鉄門

二の丸に黒門・樫木門

三の丸に大手門・西門・北門

計8門

1. 櫓

本丸に水門（左川沿）二重櫓一（南側）　二重櫓二

平　櫓三

椎木門（右）　平　櫓一

東北角　　二重櫓一（東側）　二重櫓一

鉄門（右川沿）二重櫓一（西側川沿）平　櫓一

多聞櫓　　四

計１５櫓

二の丸に黒門（右曲り角）平　櫓一

樫木門（左曲り角）二重櫓一

（右川沿）平　櫓一

計4櫓

三の丸に西門（左川沿）平　櫓一（南側土塁中折曲り）平　櫓一

北門（右川沿）平　櫓一

計3櫓

総計２３櫓

（「御年譜外伝」・『中津藩史』）

（B）外　　郭（城下町の「おかこい」）

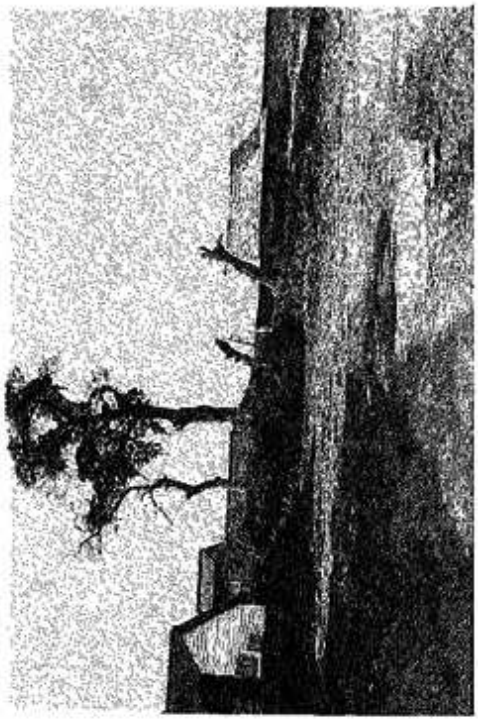
城下町を包囲する外郭を「総曲輪」と称した。また、濠・土塁・河川で囲われていることから、通称「おかこい」と呼び、「外濠」ともいっている。

中津城の外郭は、街道に通じる要所6カ所に番所を設けて番人を置いた。この城下町への出入り口を口屋と呼んだ。小倉口より広津口・金谷口・島田口・蛎瀬口・大塚口を結ぶ外郭は、濠と小川をめぐらし、土を盛りあげた土塁で囲まれていた。

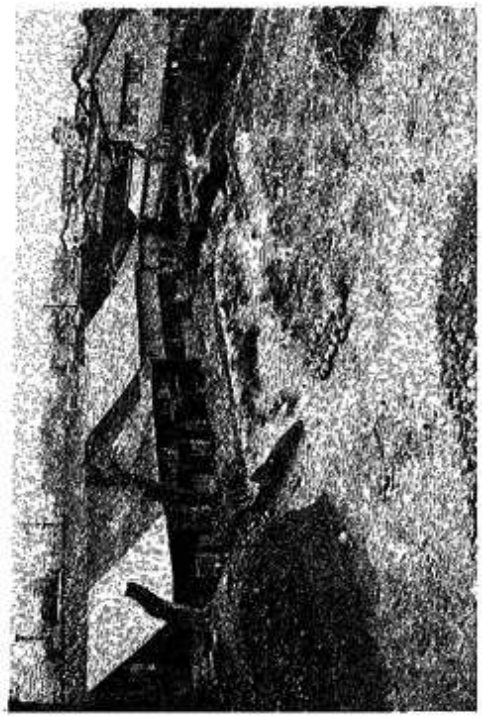
享和2年（１８０２）、この地方を旅した菱屋平七は、中津の口屋について、「入口ごとに見付番所あり、旅人を入れず、町家の内、何某が方に用事あるよしを断る者あれば、ゆるしているるなり」（『筑紫紀行』）と、城下町への出入りの厳しさが、余程印象に残ったのであろうか、そのように記き留めている。

このように、現代の中津は、江戸時代に、近世地方都市としての町割りの祖型ができ、町方商業の保護政策と在方商業の発展がみられ、農村には郷村制が確立した。

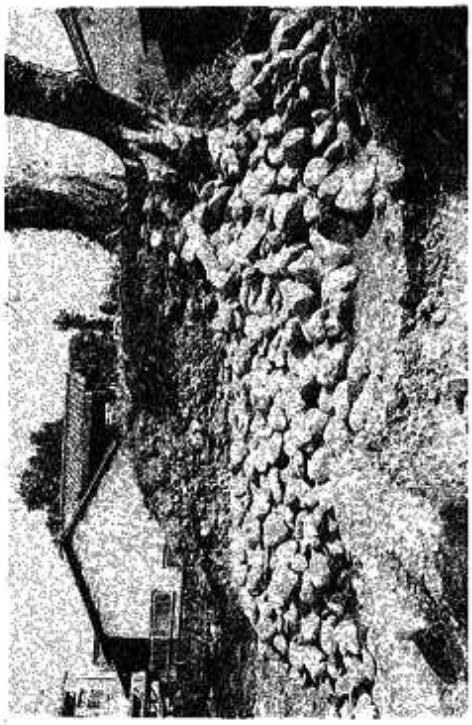
図版 1



(1)「おかこい山」全景（調査前）



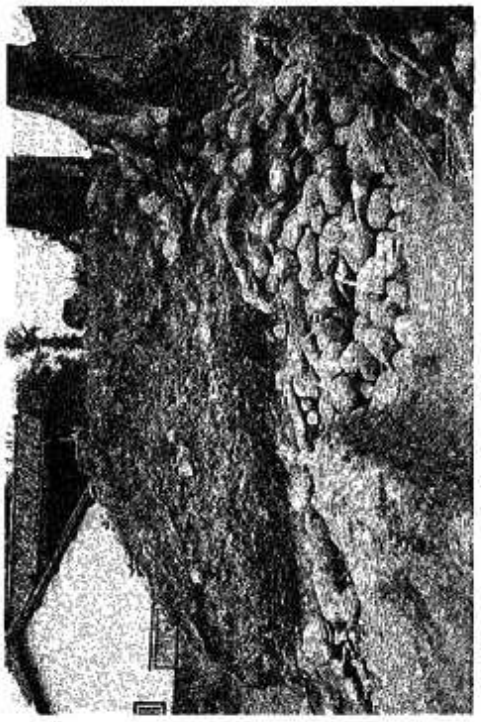
(2)「おかこい山」全景（調査状況）



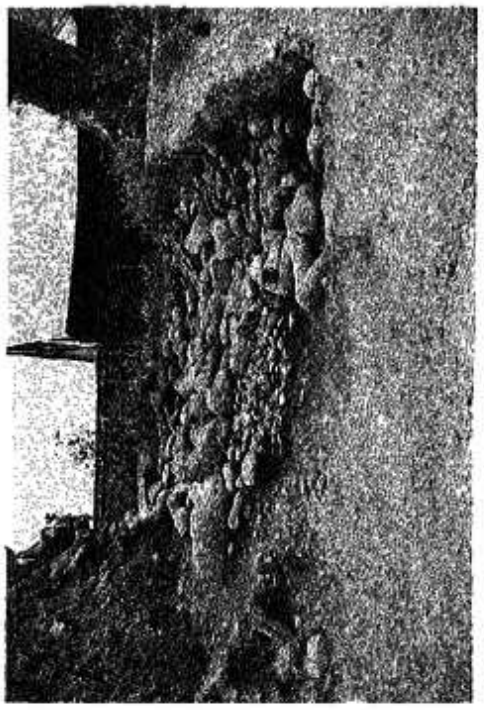
(3) 第2トレンチ「石積」状況（その1 西側より）

(4) 第2トレンチ「石積」状況（その1 北側より）

図版2

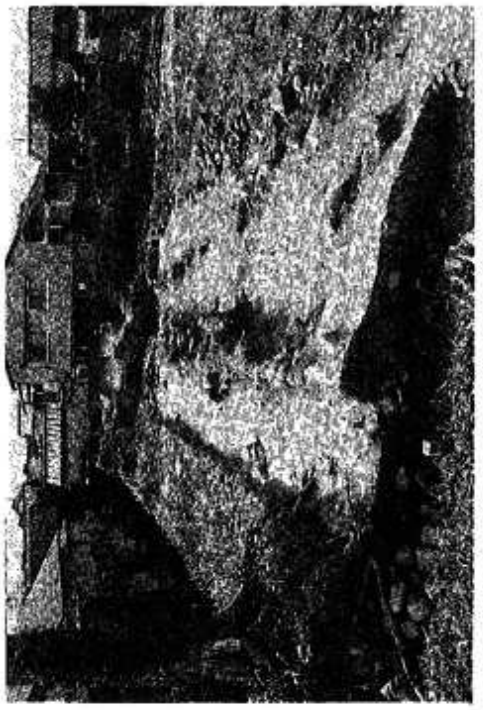


(1) 第2トレンチ「石積」状況（その2 西側より）

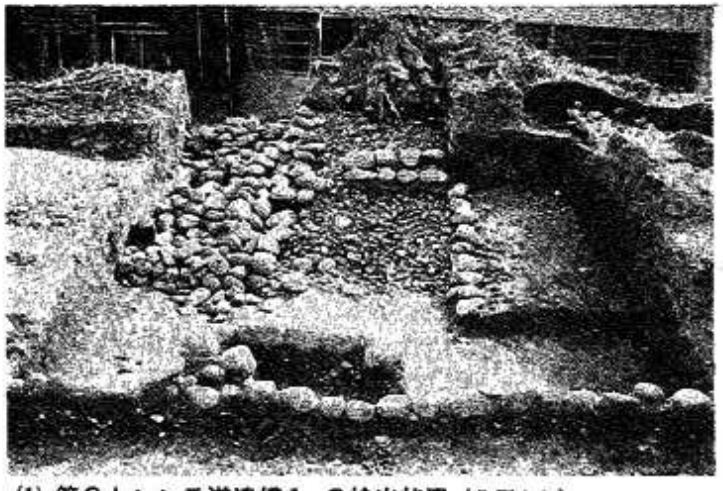


(2) 第2トレンチ「石積」状況（その2 北側より）

(3) 第2トレンチ東側土層



(4)「おかこい山」調査状況（東側より近景）



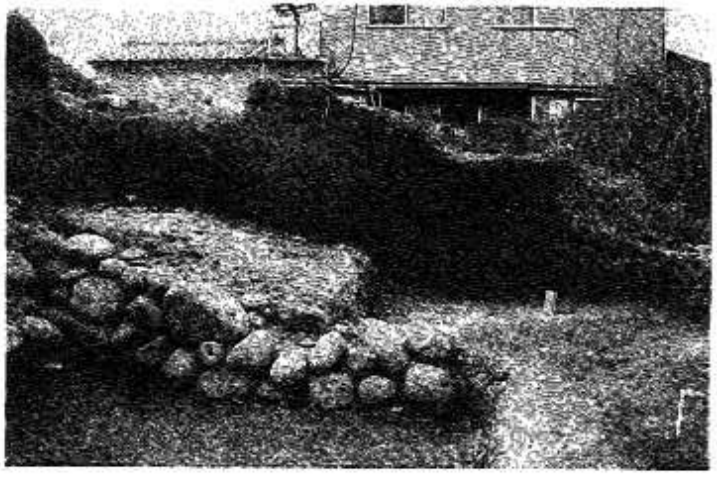
(1) 第3トレンチ道遺構1、2検出状況（北側より）

(2) 第3トレンチ道遺構1近景（北側より）

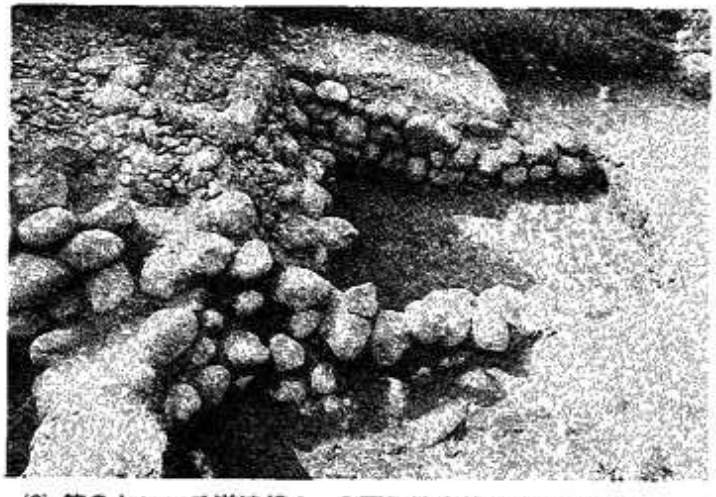
(3) 第3トレンチ道遺構1、2石垣検出状況（北側より）

(4) 第3トレンチ道遺構1、2検出状況（西側より）

(1) 第3トレンチ道遺構1、2と土層との状況（東側より）

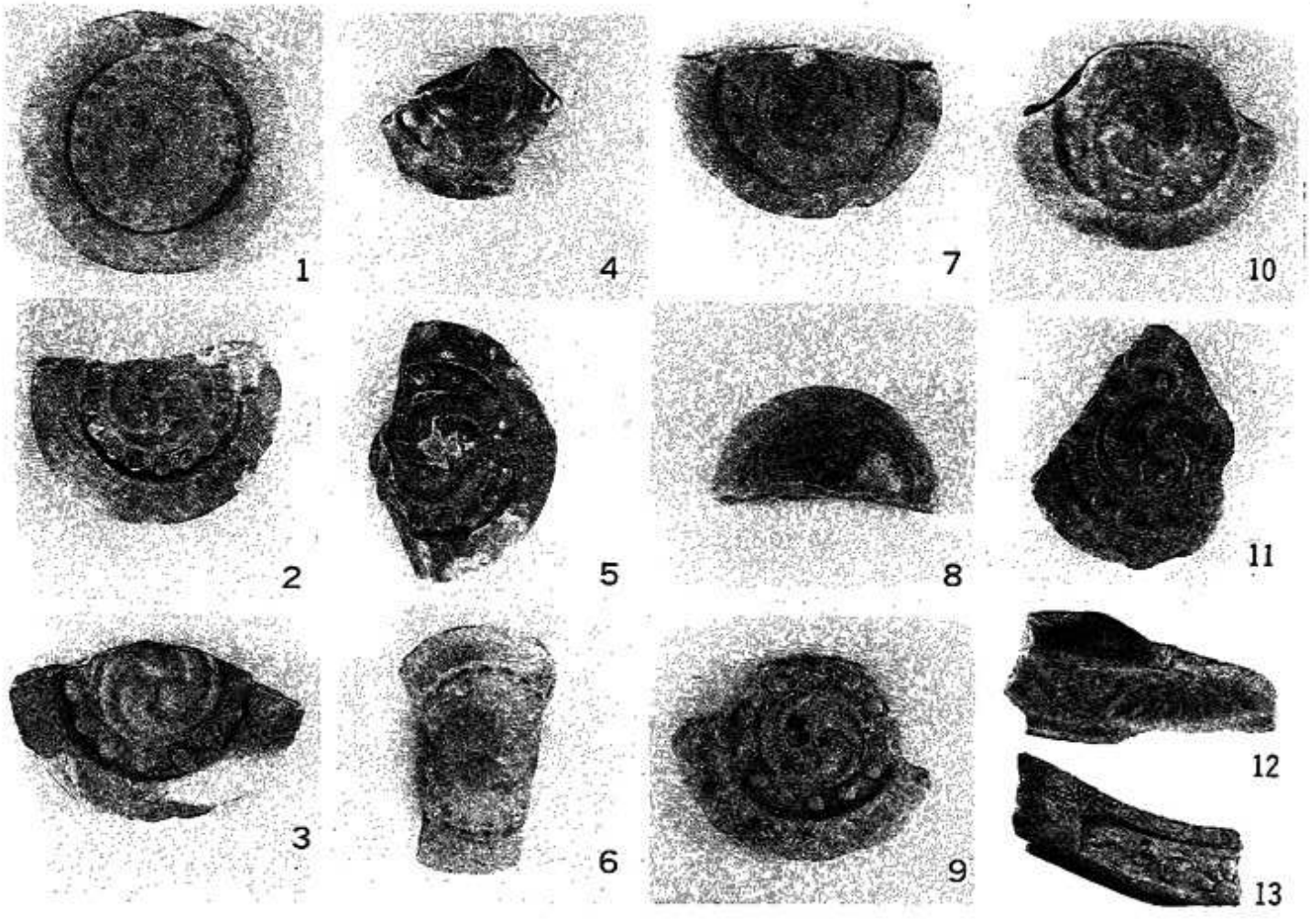


(2) 第3トレンチ
西側土層



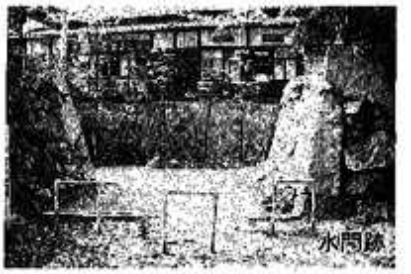
(3) 第3トレンチ道遺構1、2石垣検出状況（東側より）

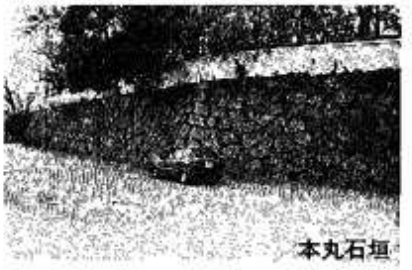
(4)「おかこい山」
調査状況
（西側より近景）

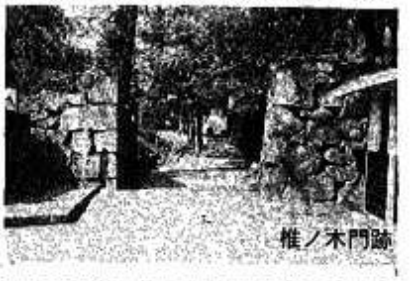


「おかこい山」出土　軒丸・軒平瓦

図版6







本丸石垣
黒田時代(右側)と細川時代(左側)の遺構が対比できる。

本丸石垣
縫い隅勾配の状況

「おかこい山」附近
内堀現況

中津城石垣関係遺構

おかこい山

中津市文化財調査報告 第9集

1990年9月30日

発行　中津市教育委員会

印刷　川原田印刷社